



ぼっぼのお手帳

鈴木三重吉

六四

「すゞ子の「ぼっぼ」は二人とも小さなく赤いお手帳を持つてゐます。この二人のぼっぼは、黒よりも、にやア〜よりも、「君」よりも、だれよりも一ばん早くから、すゞ子のお相手をしてゐるのでした。」

一ばんはじめ、或冬の、氷の張つてゐる寒い日に二歳の大きな荷馬車が、お荷物を積んで、ぼっぼたちの長く住んでゐた村から、町はづれの方へごとうた。

人に仰いました。ぼっぼは、

「お祖母さま、お祖母さま、そのすゞちゃんといふのはだれてございます。」と聞きました。

お母さまは、黙つてたゞ軽く笑ひながら、みんなと一しよに車へ乗りました。

ぼっぼは、それから今度のお家へ着きました。そのじぶんには、すゞ子の曾祖母は、まだ正木の大叔母ちゃんのところに入らつしやいました。ふゆ子叔母ちゃんもまだ来てゐませんでした。そして「きみ」の代りには千代といふ小さな女中がをりました。

ぼっぼは、先と同じやうに、お部屋のそとの、硝子戸のところへ置かれました。このお家は、表から這入つて来ると、たゞの平家でしたけれど、上へ上つて、硝子戸のところへ行つて見ると、そのお部屋の真下が広いお臺所で、そこからはお部屋は丁度二階になつて、突き出てをりました。

そのお部屋のちき目の前は砂地でした。そして、そのすぐ先が海でした。ぼっぼは硝子戸の中から、

と出て行きました。ぼっぼはあのまゝ籠に這入つて、その二ばん目の荷馬車の、一ばん後へ乗せられてゐました。二人は、一たいどこへ行くのだらうと言ふやうに、しきりにきよと〜と首を動かしてをりました。お父さまはそのとき、ぼっぼに言ひました。

「二人ともおとなしくして乗つてお出で。今度は海の見えるお家へ行くんですよ。」と言ひました。

「そして、そのお家へ、小ちやなすゞちゃん来るのですよ。」と、小石川のお祖母ちゃん、そつと二

どんよりした青黒い海を、びつくりして見てをりました。真正面の、ずつと向うの方には、小さな赤い浮標が微かに見えてをりました。

するとその向うを、黄色いマストをした黒い蒸汽船が、長い〜煙を吐いて、横向きに這つて行きました。二人のぼっぼは、

「おや〜あんな大きな船が来た。お、早い〜ぼっぼぼっぼぼ。」と言つて、大さわぎをしました。

お母さまはこのお部屋へお炬燵をこしらへて、この小さなお家がすゞちゃんを這入れてくれるのを待つてゐました。そして千代と二人ですゞちゃんの赤いおべしを縫ひました。

暗い冬はそれからまだ長くつゞきました。晝のうちには、表のじく〜した往來を、お馬や、荷車やいろ〜の人が通りました。それから、お向ひのうどんやで、機械を廻すのが、ごと〜ごとと聞えました。

併し夜になると、あたりはすつかり、穴の中のや

らに、ひつそりとなつて、たゞ、海がびた／＼と鳴るより外には、何の音も聞えませんでした。

暗い海の中には、星のやうな燈がたつた一つ、ちかり／＼と消えたりとぼつたりしました。それは、晝に赤く見えてゐた、あの浮標の上にとぼる燈でした。

ぼッぼは、そんな晩には、さびしさうに、夜でも「ぼウ／＼ぼウ／＼」と啼きながら、

「すゞちゃんはまだ入らつしやらないのですか。いつてせう、／＼。」と聞きました。

二

そのうちに、だん／＼と五月が来ました。海も空もはれ／＼と眞つ青に光つて来ました。

お母さまは、ネルの着物に、青い洋傘をさして、千代をつれて、そこいらへ買ひものに行きなぞしました。

往來には、もういつの間にか、つば／＼が、海の

ぼッぼが喜んで、あんまり大さわぎをするとうるさいから、後でそつと見せてやることにしたのでした。

その晩お母さまは、すゞちゃんの寝る小さな赤いお蒲團をちやんとしいて、その側へ寝みました。

それから翌る朝目をさまして見ますと、お家はちやんと「すゞちゃん」を生んでくれてゐました。

眞赤なお顔をした、小さな赤ん坊のすゞちゃんは、だれも知らない間に、一人で、赤いおふとんの中へ来て、すや／＼と寐てゐました。

お母さまは、よろこんで、

「お父さま／＼、すゞちゃんが来ましたよ。まあ、こんな小さなすゞちゃんが来ました。」

かう言つてみんなを呼びました。お祖母ちやんもお父さまも、

「まあ、すゞちゃん。」

「すゞちゃんや／＼。」と言つて、それは／＼喜びました。すゞちゃんは、それからしばらくたつて、はじめ、お母さまにお乳を貰ひました。

六六
向うから来て、すい／＼と往來の上をかけ違つてをりました。電信の針金にもどつさり留つてをりました。

お父さまは、いつすゞちゃんを生んでくれるのかと言つて、毎日、お家に聞きました。小石川のお祖母ちやんも、とき／＼聞きに入らつしやいました。

お家の近くには、高井さんのお祖母さんといふ、それは／＼よいお祖母ちやんが入らつしやいました。そのお祖母ちやんが、とき／＼お土産を持つて入らつて、小石川のお祖母ちやんとお二人で、早くすいちゃんを生んでくれるやうに、お家へたのんで下さいました。

すると、六月の或晩でした。

お家はお父さまとお母さまとに、あすはすゞちゃんを生んで上げますと言ひました。お母さまは、それは／＼よろこんで、すぐに小石川のお祖母ちやんに来ていたゞきました。

でも、ぼッぼにだけは、みんな黙つてゐました。

すゞちゃんは、とき／＼「おぎア／＼」と泣きました。それから、「おふんにやい／＼」と言ふやうにも泣きました。

ぼッぼは、はじめてすゞちゃんの泣き聲を聞くと、「あれはだれでせう。ぼッぼウ／＼」と、頻りにお父さまに聞きました。お父さまは、

「あれはすゞちゃんだよ。このお家が生んでくれた赤ちゃんだよ。」と言ひました。すると、ぼッぼは、

「あやさうですか。」と喜んで、ばた／＼ばた／＼大さわぎをしました。そして、

「早く見せて下さい、早く／＼。」と二人でねだりました。

併し、すゞちゃんは、まだ當分は、そつと寝かせておかなければならぬので、ぼッぼのところへつれて行くわけには行きませんでした。

ぼッぼは、毎日／＼、

「どうぞすゞちゃんを見せて下さい。早く見せて下さい。」と言つて、代る／＼やかましくせがみまし

た。それで或日お父さまは、すゞ子をそつと、お蒲團にくるんでぼッぼの籠の前へつれて行きました。

そして、
「すゞちゃん〜御覧なさい。これがお前のぼッぼだよ。」と言ひました。ぼッぼは、

「すゞ子ちゃん〜今日は。」

「すゞ子ちゃん私も今日は。」と、それは〜大喜びでかう言ひました。

でも、まだ小ちやなすゞちゃんは、まぶしさに目をつぶつて、おぎア〜といふきりて、ぼッぼを見ようともしませんでした。すゞちゃんは、たとへそのとき目を開けても、まだ、ぼッぼどころか、お父さまもお母さまも、なんにも見えなかつたのでした。だれでも小さなときは、目があつても見えないうし、お手があつても、かたく縮めて、引つ込めてゐるだけなのです。丁度、足があつても、大きくなるまでは歩けないのと同じです。

そのうちに、だん〜と暑い八月が來ました。海

「まあ、ちゃんと見えるのですね」と言つて、うれしさに笑ひました。お父さまは、こちらの椅子にかゝつて、見てゐました。お部屋の三方には、眞つ白な薄いカーテンがかゝつてゐました。その中に、すゞちゃんの着てゐる赤いふべいと、つるした赤い紐とが、きはだつて眞つ赤に見えました。

三

お父さまは、それからまた或日、すゞちゃんを、ぼッぼの前へだいて行きました。ぼッぼは喜んで、

「すゞ子ちゃん〜、今日は。ぼッぼ〜〜。」

と言つて、お辭儀をしました。お父さまは、
「こつち〜よ、すゞちゃん。こつちを御覧なさい。」と言ひながら、すゞちゃんを籠の前へするやうにして、ぼッぼを見せようとした。併し、すゞちゃんは、片手を固めてしやぶりながら、違つた方に向いたきり、いくら教へても、ちつともぼッぼを見ようとはしませんでした。ぼッぼは、

はざら〜ざら〜と、ブリキを張つたやうにまぶしく光つて來ました。すゞちゃんは、晝でも、小さな蚊帳の中に寐てゐました。

お母さまは、お部屋の鏡箆筒のふちから、察てゐるすゞちゃんの目の眞上へ横に麻絲をわたして、こちらの柱の釘へくくりました。そして、赤い縮緬の紐の兩はじに、小さな銀の鈴をつけて、それをその絲へつるしました。

すゞちゃんは、目がさめて、蚊帳をどけて貰ふと黒い、きれいな目を開けて、その赤い紐をちいツと見てをりました。

お母さまは、とき〜立つて行つて、その紐をこちらの方へ少し引いて見ました。さうすると、すゞちゃんの黒い目は、すぐに、斜にこちらの方を見ました。今度は向うへやると、すゞちゃんはまた黒目を動かして、そちらの方を見ました。

鈴は紐の動いたんびにりん〜と鳴りました。お母さまは、

「まあ、まだ〜お小さいんですね。いつになつたら、すゞちゃんが、ぼッぼや〜と仰るでせう。」と、さも〜待ちどほしいやうにかう言ひました。

お母さまは、

「ほんたにいつのことてせうね。」と言ひながら、お乳の時間が來たので、すゞ子をお膝に取りました。

「なに、もうちぎですよ。今にすゞちゃんが一人でどん〜ぼッぼのところへ來るやうになりますよ。」

丁度入らしてゐたお祖母さんは、かう仰りながら、お乳をいたゞいてゐるすゞちゃんの、黒い髪の毛をお撫でになりました。

「あゝ、ぼッぼや、いゝものを上げてよ。」と、お母さまは、ふと思ひ出したやうに、帯の間から、小さな赤いお手帳を出してぼッぼに渡しました。

お父さまとお母さまとは、いつも〜すゞちゃんが早く大きくなつてくれることばかり待つてゐました。ぼッぼもしじゆう、そのことばかり待つて待つてゐました。

その十一月に、ぼっぼは、また、すっちゃんや、みんなと一しよに、ちがつた町はづれの方へ遠く引つこして行きました。

それは、ちか／＼に正木の大叔母ちゃんが、はる／＼と曾祖母をつれて、すっちゃんを見に来て下さるからでした。そして、ふゆ子叔母ちゃんもお家の人になるので、すっちゃんを生んでくれたお家では狭くて困るからでした。

すっちゃんやんは、とき／＼ふゆ子ちゃんのお膝に抱かれて、ぼっぼの籠のところへ行きました。ぼっぼはこちらのお家でもまた硝子戸の中へおかれてゐました。すっちゃんやんは、ぼっぼの籠の側に立つちをさせて貰ふと、丁度お口が縁のところへ来ました。

すると、すっちゃんやんは、いつの間にか、ちゆっちゆつと、そこをしやぶつてをりました。それから、お手に持つてゐるから／＼を振りました。

「まア、すっちゃんやんは、先から見ると、随分大きくおなりになりましたね。」ぼっぼはかう言つて、叔母

子叔母さんは、それを聞いて、

「あや、今のはすっちゃんやんでせうか。」とふしぎさうな顔をしてぼっぼに聞きました。ぼっぼはにこにこ笑ひながら、

「えいおしまひのはすっちゃんやんですよ。まあお上手ですこと。さあもう一度言つて御覧なさい。ぼっぼ／＼／＼。」と言ひました。すっちゃんやんはまた真似をして、「ぼっぼ／＼／＼」とお辭儀をしました。た。ふゆ子叔母さんは、びつくりして、

「あら、まあ、ほ／＼／＼。ちよいと、すっちゃんやんがぼっぼ／＼／＼言ひましたよ。」と、思はず大きな聲をしてお母さまを呼びました。すっちゃんやんはその聲にびつくりして、いきなり「わア。」と泣き出しました。

これは、すっちゃんやんが口を聞いた一ばんのはじめです。お父さまやお母さまはそれを聞いて大喜びをしました。ぼっぼもそれは／＼喜んで、来る人ごとにその同じお話をしました。

ちやんとお話をしました。

それからまた寒い冬が来ました。その冬が開けると、すっちゃんやんはそろ／＼這ひ／＼をし出しました。それからまた青い八月が廻つて来ました。すっちゃんやんは、歩いては倒れ歩いては倒れて、よろちともう十足ばかり歩けるやうになつてゐました。そのときには、すっちゃんやんを見たい／＼と言つて、大さわぎをしてゐられた曾祖母も、もうこちらへ歸つて入らつしやいました。

或日、すっちゃんやんは、よち／＼とおすだれの外へ駆けて出ました。ふゆ子叔母さんは、

「あら危い。」と言ひながら、あわて、追つかけて行きました。すっちゃんやんはもう少しして倒れるところをばたりと、ぼっぼの籠につかまりました。

「すっちゃんやん今日は。ぼっぼ／＼。」とぼっぼがお辭儀をしながら二人でかう言ひました。するとすっちゃんやんは籠につかまつたまゝ、その真似をして、「ぼっぼ／＼／＼。」と言ひ／＼お辭儀をしました。ふゆ

すっちゃん、あの二人のぼっぼは、こんな時分からのぼっぼですよ。

お母さまは、もう先のお家のように、すっちゃんやんの生れてから今日までのことで、二人のぼっぼの知らないことは、すつかり話して聞かせました。ぼっぼは、それをみんな、お母さまに貰つた小さな赤いお手帳へつけておきました。二人が見て知つてゐることは、もとよりすつかり書きつけてゐます。

ですから、すっちゃんやんは、大きくなつて、御自分の小さな時分のことが解らないときには、いつでもぼっぼのお手帳を見せて貰ひなさい。

にやア／＼や、黒が来たのは、ぼっぼにくらべればずつと／＼後のことです。にやア／＼は、すっちゃんやんが、やつと這ひ／＼するところに、或叔父ちゃんを持つて来て下さつたのでした。黒は、たつたこなひだ、お家の犬になつたばかりで、もとは、そこいらの野良犬だったので。その次に、一ばんおしまひに、「君」がお守に來たのです。